

Sugar Room Babies



中条 卓

phase I

A ..ぼくたちは世界の内部に生じた球形の空間に繋がれている

A# ..地底に氷漬けされた光という名の墮天使のように

B ..臍帯―それは宇宙と宇宙を結ぶパイプライン

C ..流れているのは波動..そしてことばが世界を紡ぐ

C# ..臍帯を木の根本に埋めよ。樹木は地下と天上を媒介する

D ..世界の果てに聳え立つ一本の樹

D# ..その根は地球を包み、その枝は宇宙へ放散する

E ..裏側によって囲まれた世界。縮小する世界。(すべての点が等距離にあり、その距離が縮まりつつあるのならば地球とは重力崩壊するブラックホールにすぎないのではないか?)

F ..情報のビッグ・クラッシュ..自らの重みに耐え兼ねて倒壊する世界樹

F# ..あまりに凝縮された情報はホワイトノイズに似始める..すべてを凝集した光としてのビッグバン

G ..だがここではない場所があり、我々はそこへ向かつて旅立つことさえできる

G# ..世界の外へ目覚めよ、とぼくらは呼びかける

p h a s e II

A…ひとつの天体にひとつの世界が生まれ、やがて情報の流れ／意識が始まる。情報の結び目がこんなにもたやすく生じるなら、宇宙は生きた情報に満ちているのに違いない。

A#…ごらんあれが墮天使の羽。嵐の中で光っているだろう。荒磯になかば埋まりながら、それでも天を指している。

B…切断された幻の臍の緒が彼らを結び合わせる…ぼくらは真空を遊泳する宇宙飛行士に似ている。ぼくらの心に深く穿たれた穴から毒が沁み込む。それは樂園追放の徴。

C…四大にも光の三原色＋闇にもなぞらえられる要素が、ほぐれては絡まる陰陽の糸をかたちづくる。真空から電子が、混沌から秩序が生まれる。大きくうねる生命の波動が細い糸を伝わって歴史を駆け抜けていく。

C#…祈りが世界を変えるにつれて、君は君自身のかけらを少しずつ大地に返していかなければならない。

D..振り返ると視野のすべてを埋め尽くして赤々と燃える一本の木

D#..この世とあの世の境に一本の木が立っている。木は世界でありおまえである。そんなことも忘れたのか？

E..わたしという闇。すべてを呑み込み、しずかに光る。

F..死の味と匂いを忘れ、生の手触りを失ったとき、騒音と文字列が意識を埋め尽くす。声高に語りかけてくる幾億ものチャンネルから何をどうやって選び取ればいいのか。君は雑踏に立ち尽くす。

F#..君という世界が転換点を迎えつつある。ここで誤れば道はなくなるだろう。

G..死の瞬間にあっても意識は前へ跳ぼうとする。ここではないどこかへ

G#..どこからか声がする。声は君の真の名を呼ぶ。君の中で何かが目覚める。君は今や一変してしまった世界を見回す。君は歩き出す。新たな居場所を求めて。

p h a s e III

A…ホムンクルス

「見なさい、これが世界だ」

魔術師は骨ばった両手を、目に見えない髑髏を支えるかのように胸の前にかざした。向き合う掌に挟まれた空間に漆黒の闇が生じ、そこに回転する青い球体が出現した。やがて球体は透き通り、目をつぶり背中を丸めた胎児の姿を明らかにする。

「あれはまだ生まれておらん。もう長いことずっと夢を見続けているのだ」

「人間の姿をしています」

「そうだ、真の人間はやがて大地から萌え出で、まだ見ぬ天を目指すだろう」

謎めいた魔術師の言葉を上の空で聞きながら、弟子は球体の中を覗き込んだ。

(卵の中の小人か…なんて脆そうなのだろう)

そうだこいつはお前が守ってやらねばならん、そう叫ぶと魔術師は青い球体を弟子の胸に投げ入れた。

魔術師の弟子はたくさんの子を成し、その子孫は世界中に広がった。彼らはいっしか自分たちの胸にこの星を受け継いでいることを忘れてしまったが、眠り続ける子

供は確実に成長しながら静かに時が来るのを待っている。

A# 墮天使

墜落の夢をよく見る。背中に生えた翼で自由に空を飛んでいたのに、何者かにいきなり翼をもぎ取られて落ちるのだ。汗だくになって目覚めると、いつもきまって肩甲骨からわずかに離れたところ、何も無いはずのあたりが痛い。

何かに呼ばれた気がして街中で振り返ると、ほんの一瞬だが荒涼とした海岸の風景が見える。海から吹きつける強風の中、砂浜から生えたふたつの翼がはためいている。私はいつか一番高い塔の上から飛びたつだろう。たとえ地面に激突するだけだとしても、その刹那に自分のほんとうの姿が見えるはずだから。

B 幻臍

切り落とされた手足の先がいつまでも痒かったり痛んだりするという話を聞いたことがあるだろう。実は誰でも切り落としたはずの臍の緒がつながったままになっていて、きっかけがあればその先が痛みだす。緒は胎盤につながっているから母親の子宮はその時剥がれた胎盤を思い出してはしくしくと痛むのだ。その母親の幻の臍の緒の先にも幻の胎盤があり、そうやって痛みは最初の母

親までずっと続いている。

C…言葉が世界をつくるとは

最後から2番目の戦争が終わったあと、生き延びた人類はいっせいに仮想世界へ転移してしまった。全自動の生命維持装置に身をゆだね、現実の世界がひとりでに修復されるまで夢を見続けようとしたのだ。共同の夢の中で出会いと別れ、誕生と死が繰り返された。やがて夢の中に名前のないものが出現した。人々はそれを恐れ、排除しようとしたが、名前のないものは仮想世界からはみ出ていたため、どこにもいないと同時にどこにでも遍在して退治しようがないのだった。ようやく最後の部屋に名前のないものを追い詰めたとき、人々は同時に自らが追い詰められていたことを理解した。名前のないものは振り返り、誰も聞いたことのないことばを発した。それは外なる世界の呼び声だった。

C#…世界樹のための祈り

ぼくたちは大きな流れのひとすじに過ぎない

ぼくたちは完成への途上にある波動のひとつにすぎない

い

ぼくたちの時間は限られているが、その一瞬の何と豊かなことか！

だから、ぼくたちにしかできないことを淡々とやりとげよう

ぼくたちにしかできないやり方で

好むと好まざるとに関わらず、ぼくたちは大きな樹木の一部なのだ

だから友よ、今は安らかに眠っておくれ

D…炎上／水没する世界

あなたには世界を焼く炎が見えませんか？こうしてあなたと抱き合っている今この瞬間にもあなたの口からは硫黄の煙が立ちのぼり、あなたの身体は紅蓮の炎に包まれているのに。一歩外に出てごらんさい。世界は音もなく炎上しゆつくりと溶け始めています。そしてわたしはようやく思い出すのです、遠いむかしの約束を。わたしはこの身とひきかえに世界の火を消すためやって来たのでした。

ある日わたしはあなたの指をふりほどいて岬の端へ駆けていくでしょう。わたしが海に命じると海はひとときのあいだ膨れあがって世界を包みます。幻の水が幻の火をすべて消し去ったあと、あなたは溺れて冷たくなったわたしを抱き上げることでしょう。いつか来るその日のために、どうかあなたの熱さをわたしに注いでください。

D# 夢の土

地表がすべて舗装され大洋が人工の海岸線で包囲され
尽くしたとき、奇怪な疫病が発生して人はばたばたと斃
れていった。生き延びたわずかな人々は神託に救いを求
め、「夢の土を持ち帰れ」との指示を得た。何人もの若
者が死よりも深い眠りを与えられ夢に赴いたがひとりも
還らなかつた。ついに最後の若者が夢に向かい、彼はた
ったひとりで地上と寸分たがわぬ夢の世界を歩き回った。
世界にはむき出しの地面も土砂の堆積する砂州もなかつ
た。地上をくまなく探し歩いた末、ようやく彼は大昔に
倒壊したふたつの塔の間からひとすくい土を見いだし
た。だがどうやってこれを持ち帰ったらいい？

思いあまつた彼は夢の中で土をほおぼり飲み下した。
夢の中で彼は倒れ、深い眠りについた。そして今、彼は
夢から戻る途上にある。

E ・・ビッグ・クランチ

世界が消滅する5秒前にぼくたちは恋に落ち、ぼくは
彼女に愛を告白した。彼女が頬を赤らめながらわたしも
あなたが、と言いつつ終わらぬうちに事象の水平線がぼくた
ちを包み込み、ぼくは彼女をぎゅっと抱きしめようとし
たがその必要もなく彼女はもはやぼくと一体化して圧縮

され凝固し涅槃の闇／光！

F…バベル

世紀末に新語の流行速度がますます加速化し、言語は微分の果てに意味を失ってしまった。社会的地位、身分、職業、家庭内での序列、校区、性別、人種、年齢、血液型、星座、ありとあらゆるものが言語のカーストを形成し、しかもそれが数時間単位で生成消滅する。辞書は機能しなくなり、共通語という概念は消えた。読めない文字が氾濫し発声できない言語が幅を利かせる。はるかな昔にこんなことがあったと思ひ出した者が禁じられた記録にアクセスしようとしたが、パスワードはすでに改変されていた。ついにすべての人間が互いに通じない言葉を話すに至って人類の歴史は停止した。

F#…舳先に住む者たち

ある日、舳先に住む者がくしゃみをしたので他の乗組員たちは冬支度を始めた。

別の船では舳先に住む者が血相を変えて海に飛び込んだので、他の者たちも船を捨てた。

別の船では舳先に住む者が遺書を書き始めたので残る全員が毒を飲んだ。

また別の船では舳先に住む者が艫に向かって走り出し

たため、艦と舳先を入れ替える作業を開始した。

また別の船では舳先に住む者が向きを変えたので舵を切ることにした。

氷山が近づいている。

G…異界

フロントガラスに無数の亀裂が走った瞬間、彼は理解した。彼は自ら望んでこの世界に生まれてきたのだが、今の今まで自分の請願を忘れ果てていたのだ。ようやく思い出した、もう恐れることはない、彼はひとりごちた体の奥底から笑いが込み上げて来る。銃弾と化した無数の破片に切り裂かれながら、彼は高らかな笑いを笑う。

G#…呼ぶ声

最近、妙にふさぎ込むことが多くなった。自分を含めたこの世界全体が嫌で嫌でたまらないのだ。と同時に夢を見るようになった。見慣れない女、ずいぶん年を取っているようでいかにも若々しい女が霧の中でぼくを呼んでいる。その姿は最初のうちぼんやりしていたが夜毎にはつきりとしてきて、ついにある夜、女はぼくの前に立ってぼくの名を口にした。それは人間のことばではなく発音することさえできなかつたが、女はそれこそがぼ

くの本当の名なのだと告げる。

「さあ修行をはじめましょう。合図したらわたしの歩いた通りに歩くのです」

女は霧の中にかすかに見える細い道をしばらく歩き、振り返ってぼくを招いた。歩き出そうとして、ようやくぼくは気づく。ぼくは険しい山の頂に立っていて、女が招いているもうひとつの山の頂へは高い針葉樹の梢を渡って行くしかないのだった。女はかすかに微笑んでもう一度ぼくの名を呼んだ。

ぼくはすでに理解していた。ぼくは夢の中で針葉樹の梢から転落して何度も死ぬだろう。それでもぼくは目を覚ますことができず、何度でもこの行を繰り返す。そして、ついにこの行をやり遂げる時、ぼくはまったく新しい身体の中に目覚めるのだ。

著者紹介

中条 卓 (Nakajo Taku)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/t-nakajo.html>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_l/sugar/index.shtml

著作：タイムトンネル掘り (THE TIME TUNNEL DIGGER)

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/nakajo/time.html

在宅戦闘員

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/serials/nakajo/index.shtml>

鏡の国のファルス

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/anthology/mirror/index.shtml>

蟻の王

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_l/ants/index.shtml

Sugar Room Babies

2002年7月8日 第1版第1刷発行

著者 中条 卓 (Taku Nakajo)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

表紙 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。
希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。